

川口幸大、堀江未央（編著）『中国の国内移動——内なる他者との邂逅』

■ 出版地：京都 ■ 出版社：京都大学学術出版会 ■ 出版年：2020年 ■ 総頁数：311頁 ■ 定価：3,600+ 税

横田 祥子*

本書は、中国の文化人類学研究を担う研究者が、2000年代以降の中国国内の多様な移動形式と移動によって新たに生じているコミュニケーションのあり方や経験について詳らかにしたものである。各章とも重力感のある豊富な民族誌的データを用いており、非常に読み応えがある。

本書がテーマとする国内移動は、主に1978年以降の改革開放政策において、地域間の移動が活発化する中で誕生した。計画経済時代、職業や住居は管理・分配されており、人の流動性は低かったが、改革開放政策以降では、地域間、産業間、企業間の移動が急増し、人の流動性が高まった（厳 2010: 57）。特に市場経済が浸透した1990年代以降は、沿岸部への出稼ぎ労働者の流入が拡大した。こうした農村出身の出稼ぎ労働者は「農民工」と呼ばれ、その家族と共に都市の外来人口を構成している。

農村出身の出稼ぎ労働者と都市地元住民は、労働市場において大きく分断されている。出稼ぎ労働者は非正規雇用が主で私企業に就労するのに対し、都市地元住民は正規雇用で公共部門に従事する傾向がある。さらに出稼ぎ労働者自体、元々の戸籍の種類が農業／非農業かによって転職機会に差があり、そのことによっても都市の労働市場において職業上の階層化が生じている（厳 2010: 59）。

本書は以上のような労働市場を背景にしているものの、「農民工」に派生する現象を「社会問題」と捉える立場からは距離を置き、移動研究に対する文化人類学分野からの貢献を念頭に編まれている。特徴的なのは、本書がエスニシティに注目し、移動に伴い変化する都市のエスニック状況を論じている点である。国内移動の

流動性の高まりに伴い、同じ漢族でも異なる方言集団に属する人びとが、あるいは異なる民族同士が接触し、交渉する状況が生まれている。本書はそうした新たな都市のエスニック状況を的確に捉えており、中国の新たなエスニシティ研究の書としても読むことができる。

構成は、序章に続き、移動によって生み出された地元民と外来者のコンタクト・ゾーンについて論じた第I部（第1～3章）、移動がもたらした文化面での変化を論じた第II部（第4、5章）、農業収入を補完する出稼ぎ労働とそのイメージの変化や、20世紀初頭の移住と民族関係、また政策移住を論じた第III部（第6～8章）、そして終章からなる。

序章 国内移動をいま論じる意味——中国と日本

川口幸大・堀江未央

第I部 移動が生んだコンタクト・ゾーンにおける社会関係とはいかなるものか

第1章 あんたがおれの百度だ——珠江デルタの「本地人」と「外地人」 川口幸大

第2章 都市を出る人、都市に来る人・戻る人——広東省の地方都市汕尾の事例から 稲澤努

第3章 出稼ぎ先は「小さな国連」——浙江省義烏市に暮らすムスリムたち 奈良雅史

第II部 移動は何を広め流行らせているか

第4章 移動の危険に対処する呪術——雲南ラフの男たちと出稼ぎ 堀江未央

第5章 移動が生み出すトランス・エスニックな子ども服——雲南省から貴州省へ流通するモン／ミャオ族衣装と民族間関係 宮脇千絵

第III部 移動によってエスニシティと他者像はいかに

* 滋賀県立大学

再編されているか

- 第6章 出稼ぎに行くのは甲斐性のない人——モンゴル人の移動と生活基盤 包双月
- 第7章 「君たちは何をしている人なのか？」——広西三江県におけるマカイ人の定住と地域社会 黄潔
- 第8章 移りゆく「辺境」イメージ——上海から雲南への「支辺」移民の語りを通して 孫潔
- 終章 「境界越しの邂逅」の持つ可能性 堀江未央

以下では、各章の概要を紹介した上で、序章で提示された問題点に加え、エスニシティに着目して本書を読み直していく。

序章では、本書の主題である「国内移動の何が問題なのか」という問いの背景として、新中国成立以降の人の移動を規定する戸籍制度と、経済の開放政策以降の労働力移動について説明をしている。その上で、本書の目的が国内移動に伴い派生する諸社会問題の検討ではなく、多様な背景を持つ人びとが邂逅する場を描くことに示されている。続いて、第1部から第III部の各章の視点と概要が記されている。

第1章では、広東省広州市村落部での20年来のフィールドワークに基づき、他地域からの出稼ぎ労働者と地元住民の関係の変化が描かれている。20年前、地元住民は出稼ぎ労働者を「外地人」と呼び信頼せず、また都会的で経済発展の進んだ広州の優位性を傘にきた態度を取っていた。しかし時は流れ、地元住民は出稼ぎ労働者の労働に依存し、他方出稼ぎ労働者を顧客とするビジネスを展開するなど、経済的な依存関係が強まっている。また、出稼ぎ労働者がもたらした辛い料理が人気を博し、広東料理に誇りを持ってきた人びとの味覚に変化をもたらしているという。このように、地元住民と出稼ぎ労働者との緊張関係は緩み、親密ではないものの疎遠でもない関係が築かれている。

第2章では、同じく広東省の汕尾市が舞台となっている。本章では、広州市や深圳市、香港に近いこの地方都市において、他地域への転出、他地域からの転入、またUターンという目紛しい移動の様相が報告されている。当該地域では、1950～60年代の政治闘争の最中、香港へ大量の脱出者を送り出した。その後香港で成功を収めた人びとが帰郷し、大盤振る舞いをする事によって、移住者の成功物語が印象付けられてきた。また、珠江デルタへの出稼ぎ、ビジネス展開や就学による移動が繰り返され、一定の成功後にUターンする

というパターンが示され、地元住民の移動の戦略が描かれている。それに比して、他地域からの出稼ぎ労働者は、農業やサービス業に従事するにとどまっている。地元住民は、経済的・社会的優位性を保持してきたものの、公共交通機関での言語使用や職場での人間関係などの微細な観察から、その優位性が徐々に失われる兆しが伺える。

第1章、第2章で挙げられた事例では、労働市場の階層化がよく描かれている。2つの章に登場する出稼ぎ労働者は、建設現場の日雇い労働者や飲食店の給仕をしており、第2章では「代耕農」という離農者の代わりに耕作を請け負う仕事に従事している。さらに第2章では、ホスト社会である汕尾市の地元住民の移動は、就学やビジネスを契機としたものである一方、汕尾市に移入する出稼ぎ労働者は、先述した特定分野の職業に従事している。このように地元住民と出稼ぎ労働者の間には、移動形式に明確なコントラストが見てとれよう。

また第1章、第2章では、外来人口はホスト社会において、同じ漢民族ながら出身地名がついた「○○人」「北国野郎」などと呼ばれ、ある種の「エスニック・グループ」として認識されている。そこでは、方言の違いに加え、労働市場の分断による職業的階層の分化が、あたかも特定の地方出身者の属性であるかのように、ホスト社会によって読み替えられている。しかし、出稼ぎ労働者は同郷ネットワークに支えられている様子はなく、個々の散発的な労働者として存在しているようである。

第3章は、「100円ショップのふるさと」と呼ばれる浙江省義烏市への回族ムスリムの移住・定住化について論じている。義烏市は、雑貨の世界的市場があることから、中東の商人が多く訪れる都市である。アラビア語を学んだことのある回族ムスリムは、その通訳業を務めるため義烏市へと移動・定住してきた。通訳の需要が縮小してからも、回族ムスリムは適度な都市性を求め、この地に移住している。本章は、まさに移住動機が経済的要因に還元されない例を提示している。

第3章が描く人びとは、通訳、ムスリム相手のレストラン・衣料品店経営などのエスニック・ビジネスに従事している。義烏市の回族ムスリムは、宗教、言語という文化資本をビジネスに活用し、ムスリムの多い地元コミュニティに参画している。つまり、彼らは職業・滞在期間・地元コミュニティへのコミットメントの点で「農民工」とは大きく異なっている。

続く第II部は、人の移動、多様な人びととの邂逅という経験が、宗教的行為や民族衣装の造形に反映される様相を描いている。第4章は、雲南省西南部国境付近に住むラフ族の人びとが1990年代以降、雲南省西双版纳を経由し中国沿岸部へ出稼ぎに出るようになった現象を取り上げている。ラフ族にとって出稼ぎとはイニシエーションの意味合いが強く、出稼ぎによる経済的成功は必ずしも達成されていない。第4章では、ラフ族が出稼ぎ先で危険から身を守るため、タイ族から呪術を学ぶ事例が提示されているが、彼らは移動によって必要になった新たな呪術をさらに異民族から学んでいる。しかもその呪術は出稼ぎ先でしか通用しないなど、意味世界の区分の仕方が大変興味深い。

第4章は、移動の経験がエスニック・グループ間関係の中で形成され、またインター・エスニックに解釈されていることを示している。本章は、文化人類学的研究が移動研究に対し、いかなる貢献をなし得るのかを提示してくれており、高く評価できる。

第5章は、雲南省における民族衣装の製作者の変化や流通網の拡大を検討しながら、民族衣装に付随するエスニック・バウンダリーの固定的側面と流動性を論じている。特に、「何族のものということはない」(p. 162) 子ども服の誕生は、境界性を強調する大人の民族衣装とは異なり、「民族集団の境界の柔軟性や流動性を再確認させるもの」(p. 198)と結論付けられている。

本書において唯一モノに焦点を当てて論じたのが第5章であり、少数民族の「子ども服」というカテゴリーの誕生とデザインをテーマにしている。少数民族風の「子ども服」の誕生は、少子化が著しい中国において子どもが占める位置や、漢族側から見た西南少数民族文化の位置付け、さらには西南少数民族の連帯などが背景にあることを示唆している。

第III部は、移動の主体や時代背景が多様な3つの章が取められている。第6章は、内モンゴル自治区通遼市のモンゴル族の出稼ぎ状況について論じている。通遼市一帯では、1980年代以降、余剰労働力の移動が起こり、辺境の農村から自治区東部の内陸部へ、さらに沿岸部へ出稼ぎに行く人の潮流が起こっている。元々遊牧をしていた人びとに土地が分配され、1996年と2004年、段階的に土地使用権の分配が完了した。2004年以降は、土地の貸し借りが個人間で行われるようになったため、実質上土地の取引が可能となり、個人や家庭の土地への結びつきが弱まった。農業で失敗した人のみならず、農業を支えるためにも、モンゴ

ル族の人びとは出稼ぎに行くようになり、その傾向は2016年以降顕著となっている。

章題にもなっている出稼ぎする人＝「甲斐性がない人」とは、現地語では「ソーリ（基盤）のない人」(p. 204)と言われている。この評価は、土地に根差した生業での成功に基づいた評価からきている。当該地域のモンゴル族は、遊牧を生業としていた時代、所有家畜数が成功の基準であったが、農業への転換以降、所有農地面積こそが成功の基準へと変化した。

こうした表現は、生業が変化しても根本的な思考様式が変わらないことを示しており大変興味深い。また本章は、農民となったモンゴル族が出稼ぎ労働へと駆り立てられる要因や、出稼ぎ労働が出身社会へ与えるインパクトについて紙幅を割いて論じており、人の移動研究で期待される経済的側面の検討も十二分になされている。

第7章は、明代から清代、さらに中華民国時代に至るまでの客家系「マカイ人」の、広西チワン族自治区三江県のミャオ族郷への移動と、ホスト社会先住者のトン族、ミャオ族との民族間関係を論じている。まず題名にもある「マカイ人」(やたらと「マカイ＝何」と言う人びと)という他称がユーモラスである。客家人は移住後、商業貿易を掌握すると、ミャオ族を周辺地域に追いやった一方、舟運業では他の民族の労働力を必要とした。新規移入の波に加え、道路の開通や産業の変化に伴い、諸民族の居住地域・就業形態は大きく変化した。

本章は、客家人形成をめぐる歴史研究に連なるものと言えるが、明末清初から民国時代までという長期間にわたる移住を取り扱っているだけでなく、2010年代のエスニック状況までも論じている。本章のように、近代に至るまでの移動やホスト社会での民族関係を扱った研究は珍しい。また本章からは、新中国以前の人びとの移住状況が伝えられ、1949年中華人民共和国成立後の政策移住や、農民工の散発的な移動とは異なる移動形式が見て取れる。

第8章は、国策として行われた「辺境を支援する」ための移住政策により、上海から雲南省へ移住した人びとのライフストーリーを通して、彼らが「辺境」をどのように認識しているかを論じたものである。国策に協力するという名誉ある移住であったものの、出身地上海と雲南省との圧倒的な経済格差を羨み、自由に帰還できない苦しさや吐露されている。また、国策移住者に対する政府の補償方法は独特で、あくまで移住

者を移住先に縛り付けておきたいことがうかがえる。

同じく冷戦時代、中華人民共和国の社会主義国家建設に貢献すべく、何十万人もの海外華僑が帰国した（cf. 北村2017）。本書は、東アジアの冷戦体制下、個人が何を思い国内移動を志向したのかを描くことで、当時の国家政策を逆照射してくれている。本章がクローズアップした国策のための移住もまた、新中国成立後の国内移動の大きな特徴である。

以上が本書の概要と、評者による読み直しである。次に、本書を読んで感じた疑問点を挙げておきたい。第一に、「コンタクト・ゾーン」という概念を使用することの意義についてである。「コンタクト・ゾーン」とは、「地理的に隔てられていた主体が共在する時空間」を指す。「コンタクト」は単なる他者同士の接触ではなく、植民者と被植民者、旅行者と訪問される者というような非対称的な権利関係にある者同士が、接触し、いかにして相互関係を形成するかを意味している（Pratt 2008 (1992): 8）。しかし、本書ではプラットによる定義というより、その後援用された「異なる文化的背景を有する人びとの接触が生じる領域」（田中・稲葉（編）2011: ii）という意味合いで、「コンタクト・ゾーン」概念を使用している。

まず「コンタクト・ゾーン」という概念を用いる場合、接触する他者同士を相応に論じる必要がある。しかし各章では、出稼ぎ労働者あるいはホスト社会のいずれかに寄り添う記述がなされている。加えて「コンタクト・ゾーン」を明示する章では、ホスト社会、いわばマジョリティに属する人びとにとっての「コンタクト・ゾーン」が描かれるにとどまっている。そのため、マジョリティ側に寄り添って描かれた「コンタクト・ゾーン」は、非常に調和的なものになってしまっている。もしプラットの定義に従った場合、調和的なコンタクト・ゾーンは、出稼ぎ労働者から見たとき、全く別の空間として描かれたのではなかろうか。

第二に、1980年代以降の国内移動により、都市部で生み出された新たなエスニック・グループ関係についてである。少数民族の国内移動を取り上げた章からは、エスニックな背景やエスニックなネットワークが移動に寄与していることが顕著である一方、漢民族の出稼ぎ労働者ではそうした背景は浮かび上がってこない。漢民族の出稼ぎ労働者は、ホスト社会からは出身地名を冠した他称で呼ばれるものの、都市で比較的独立した存在であるかに見える。

ここでの疑問は、地縁や出身地に基づくネットワー

クは、少数民族においてのみ発動しているのだろうか、というものである。第7章では、明代から清代、そして中華民国時代に至るまでの客家人の移動を扱っていたが、そこで描かれていたような、集団で国内移動をし、ホスト社会で方言集団別にコミュニティを築き、生業や居住地の棲み分けを行うような関係と、今日国内移動によって誕生するエスニック・グループ関係はいかに異なっているのであろうか。

第三に、グローバリゼーション時代の国内移動という側面についてである。本書では、国内移動の背景として、中国から／への国際移動に一部言及されているものの（第3章、第4章）、多くの章では国内事情に完結した記述がなされている。グローバリゼーションの進展は、人の移動形式に大きな影響を与えてきたが、中国国内の人の移動にどのようなインパクトを与えたのであろうか。例えば、かつて人の移動は男性中心になされてきたが、1970年代以降、再生産労働に対する需要の高まりから、移民の女性化が起こっている。中国という広い国土において、そのような変化は生み出されたのであろうか。また、国内移動の流動性の高まりは、中国から／への国際移動海外移住とどのように関連しているのであろうか。

本書は、移動研究に対する文化人類学の貢献のあり方を考える上でも、中国都市部での新たなエスニック関係を考える上でも、重要な視点を提供する良書である。加えて本書は今後、中国都市部のエスニック研究の展開を予感させる一冊である。また、本書の成果を以て、社会学・経済学分野との研究交流が進展することを期待したい。

参考文献

（日本語文献）

北村 由美（編著）

2017 『20世紀アジアの国際関係とインドネシア華人の移動』 京都大学附属図書館。

敵 善平

2010 『中国農民工の調査研究——上海市・珠江デルタにおける農民工の就業・賃金・暮らし』 晃洋書房。

田中 雅一、稲葉 稷（編）

2011 『コンタクト・ゾーンの人文学 第II巻——Material Culture／物質文化』 晃洋書房。

（英語文献）

Pratt, Mary Louise

2008 [1992] *Imperial Eyes: Travel Writing and Transculturalization*, Routledge.